

文楽
 人形浄瑠璃
 秋の樂
 新行作



文楽
 人形浄瑠璃



文樂秋の新作興行

爽涼の秋を迎へてみなさまの御健康の益々お熾んなこと
をお欣申上ます。皆様から「我等の郷土劇場」そして厚き
支持を資はつてゐる文樂座人形淨瑠璃は爰に新秋九月の好
機を獲て劃期的な素晴らしい動きを見せました。仍ち私等
に異常の感激を與へたるニュース上海戦秘話を特作編曲し
たるを始め、大阪の發展を人形舞臺に移したる景事、さ
ては、長らく上演を見なかつた名曲大作の配列に若手新進
氣鋭を網羅しての潑刺たる更新興行で御座ゐます。この我
我の熱き力に燃ゆる人形淨瑠璃の新動向に多分の御同情を
寄せられて、より厚き支持御後援の程をお願い申上ます。

昭和七年九月

大阪・四ツ橋

文樂座

昭和七年九月一日初日

初日 四時開幕
二日 五時開幕

・御觀覽料・

一等椅子席 御一名 金二圓
二等 席 御一名 金八十錢
三等 席 御一名 金四十錢
一等お座席 御一名 金二圓三十錢

一等お座席は五日前より
一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
專用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴
草履はそのまゝ御入場出来ませ
らなるべく靴、草履でお越しを願
ひます。



勸進帳

武藏坊辨慶 竹本大隅太夫
 富樫左衛門 竹本相生太夫
 伊勢三郎 竹本町太夫
 駿河次郎 竹本長尾太夫
 片岡八郎 豊竹富太夫
 常陸坊 竹本綾太夫
 梶下左忠太 竹本陸路太夫
 源義經 竹本南部太夫
 竹本小春太夫

鶴澤道八
 竹澤團六
 鶴澤芳之助

勸進帳

淨曲の勸進帳は遠く貞享三年に宇治加賀掾の西の橋初代竹本義太夫の名聲を争つた際、「凱陣八島」を出しその中にこの勸進帳を出したところあります其後「番場忠太紅梅籠」「癡靜胎内拵」にもあります。今度上場される「勸進帳」は明治二十八年書下したのが博勞町彦六座跡の稻荷座で初代團平の作曲であります。大体に歌舞伎の勸進帳と謡曲の安宅を合せたもので、以來團平師の秘曲として来たものであります。

(床本) 勸進帳

斯様候者は、加賀の國の富樫の

某にて候。扱て頼朝義經御申不和にならせ給ふにより、判官殿奥州秀衡に頼み給ひ十二人の作山伏にて御下向の由頼朝聞し召し及ばれ國々に新關を建て山伏を堅く撰み申せこの御事にて候。去間この所をば某承つて山伏を留め申候。今日も山に誰かある、御前に候。今日も山伏の御通りあらばこなたへ申候へかしこまつて候。旅の衣は篠懸の旅の衣は篠懸の、露げき袖やしぼらん、是やこの行も歸るも別れては知るも知らぬも逢阪の、山隠す霞ぞ春は恨めしき。鴻門の楯破れ、都を後に義經公、習はせ給はぬ旅姿、身は山伏の強力さ、袖の篠懸露霜をいつを限りさ白雪の越路の春に急ぐな

八島にて機信吉野にて忠信、身代り
 として死せし事、無念なりとの仰は
 爰なり。斯つらなりし銘々は生れし
 日こそ替る共、死する所さる日は
 一緒兼て誓はずや、況して敵を侮
 るは、能き侍の仕業ならず、せく
 所ではない、先程も申す如く、この
 關一つ踏み破つて通れば逆、行先々
 にかゝる沙汰の有時は、事を求めて
 破る道理、たやすく陸奥へ参り難し
 それ故にこそ、恐れ多くも御主君を
 新客強方に御仕立申奉るは、無難
 に關を通らん心底、兎にも角にも
 某に、御任あつて、御笠深く召さ
 れし上、草臥たる体に粧ひ、我々よ
 り後に引下つて御通りあらば、よも
 我君さば思ふまじ、ホ、辨慶いしく
 も申たり、我は如何なる艱難もいと

はず事の成就を、旁々配慮有るべし
 こ、仰に皆々ほつこ計君の御運の拙
 きを、思ひはかつて顔見合せ、無念
 と落す涙の雫、安宅の關の道芝に、
 朝露置し如くなり。斯くては果じこ
 辨慶は氣を取り直しいかに強力、疲
 れはさこそ今一息、氣を勵まして歩
 むべし、いざ通らんこ、諸共に關の
 方へぞ立かゝる、辨慶關の月に聲を
 通じ、いかに關守殿御役目御苦勞千
 萬、我々同行の山伏通行いたしたし
 イザ開門あれと言入れば、番卒共は
 口々に、スワ山伏の來りしとは、イ
 デ召捕へ一詮議、旁々來れど立駆け
 ば、コハ粗忽なり關守達何故あつて
 開門もせず召捕んとは狼藉千萬、仔
 細は如何にぞ尋ねれば、梶下左忠太
 聲高く、ホ、其仔細さいふは頼朝義

經御中不和と成らせ給ひ、義經公は
 蟹山伏となつて奥州御館秀衡に便り
 給ひ下向有る由聞し召及ばれ斯の如
 く諸國に新關を構え堅く詮議を仕
 るこ。云尾に付て番卒共、警誠の
 山伏にもせよ、修驗者に限り堅く通
 路成難し、たつて關を通るこあらば
 一命にも及ぶべし、足元の明るい内
 誠の山伏さいふ證據を置、早々爰を
 立ち去られよと威猛高にひしめけば
 ハ、委細承りて候が、夫は作り
 山伏をこそ止めよとの仰なるべし。
 誠の修驗者を止めよとの仰にてはよ
 も有るまじアラ六ツク數の間答無
 益なり、一人も通す事罷りならんこ
 言ひ放す、こなたはほつこ力を落し
 アラ頼なし力なし、ハ、ア情知らざ
 る人々かな、ソモ我々同行は、悉

んヤア〜者共布施物是へ持参れ、
 はつこ心得士卒共、持ち運んだる白
 木の藁、加賀絹袴其外に多くの布施
 物取揃へ御前にこそは並べけれ、如
 何に先達殿我幼少の頃よりも佛陀を
 歸依し多くの聖人に逢ふ度毎、其宗
 門の旨を聞けり、然るに未だ先達の
 如き名僧に逢はざる故、修験の法の
 委細を知らず、今我尋る趣を一々
 御答下さりよふやこ心有りげな正廣
 か詞に扱はと思へ共爰そ大事と思案
 を極めホーいしくも問はれし關主殿
 愚僧も心得居るがごは殘らず御答へ
 申すべし、ホー早速の御承知過分に
 存るさらば御尋れ申すべし、然らば
 御答仕らんごたがいに形改むれ
 ば義經主従息を詰様子如何ぞ守り居
 る、正廣膝を進ませていかに先達抑

々世に佛徒の姿種々ある中に、山伏
 達の異形の姿はいかなる仔細に候
 ぞ、夫レ修験の法といへば胎藏金剛
 兩部の旨を修し、嶮山惡所を踏み開
 き、世に害をなす、惡獸毒蛇を退治
 して難行苦行の功を積み惡靈亡魂を
 得説成佛させ天下泰平の祈禱を修す
 表は驗魔の相を顯し惡鬼外道を降伏
 さす是神佛の兩部にして百人のいら
 高珠敷に、佛跡の利益を顯す。ム
 シテ又袈裟を身にまこひ、佛徒の姿
 に有ながら頭に頂く兜巾はいかに、
 ホー則兜巾は五智の寶冠にして武
 士の兜に等しく、十二因縁のひだを
 すえて是を頂く、ムシテ篠懸の因
 縁は、是ぞ九會曼荼羅を表す、黒き
 脚半は胎藏界の黒色也八ツ目の草鞋
 は八葉の蓮花を踏むにかたざる、シ

テ山伏の立立は則ち其身を不動明王
 の尊体に形ざる也、出入る息はあう
 んの二字、ム、扱又寺僧は、錫杖を
 携ゆるに、山伏、檢の金剛杖に、五
 体をかたむるいはれば何ぞ、事もお
 ろかや金剛杖は天笠檀特山の神人阿
 羅々仙の持給ひし靈杖にて胎金兩部
 の功德を籠めたり、釋尊未だ瞿曇
 沙彌と申せし時阿羅々仙に給仕して
 難行の功を積み御名も怨善比丘と改
 めて此金剛杖を授かり給ふ、かゝる
 靈杖成ばこそ、吾祖先役の小角を用
 ひて山野を経歴し給ふなり又杖に、
 切目を入たるは、地、水、火風空、
 木火土金をかたざりたり、ム、し
 て、佛門に有ながら帶せし太刀は
 只者をおごさん爲なるや、誠に害せ
 んためなるや是にも言はれありやい

客待と、聞より皆々はつこばかりス
 ワ我君を怪しむるは一期の浮沈極り
 ぬと皆一同に立歸るア、暫しあはて
 事を仕損ずなヤイ強力め早々通り
 おらぬかこ、叱りつければ富樫之助
 ア、イヤ、あれはこなたより止め
 たり、ム、何故有つて留められしぞ
 サ、い、い、さればこそアレなる新客
 九郎判官ナニアハ、義經殿にヤ
 サ似たる故に留め申すム、イスリアノ
 強力が判官殿に似たるさな、いかに
 もハ、い、ヤイ新客の強力めウヌ
 儂は、適の果報者、日本の名物
 義經殿に似たさいはる、仕合せは我
 等が爲にはア、不仕合せエ、マ憎い

奴エ、腹立ち日高くば能登の國迄參
 らんと思ひしに僅かの笈を貰ふて後
 に下ればこそ關守殿に怪しまれ修行
 の邪魔なす奇怪者此先々の關所にも
 かゝる疑の有時は猶々路のさまた
 げなりア、何ぞせんム、夫れよ、イ
 ヤナニ關守殿近頃御無体には候へ共
 御不審のかゝりしアノ強力我々歸路
 の砌迄御預り下されて十分の御證議
 を願ひたし我は能登迄急かん、行か
 んとするを強力は衣の袖に取纏りコ
 ハ情なの先達殿、是迄長道中の泊り
 く、に心を付け道の歩みは重荷を貢
 ひ幾瀬の艱難凌ぐのも今にも行を仕
 遂げん爲其甲斐もなき無念慈悲の詞

何卒我も召連れて下されかしこ、む
 れば先達は怒の顔色ヤアぬかしたり
 其たわ言汝計りが重荷を貰ひ難行を
 すると思ふか此先達も元は新客惣じ
 てこの程より何についても教えを背
 く憎き奴エ、エ、イヤテ物を見せて
 くれんすこ金剛杖を追取つて情用捨
 も有らばこそ脊骨腰骨きらいなくさ
 ん、くに打擲しイカニ方々、賤し
 き強力が成敗に御身達の太刀刀を借
 らんよりこの杖にて打殺さばかれも
 成佛致すべしと又打かゝるをヤレ暫
 く夫にて心中の疑ひ晴申たり我等の
 不明は新客の災難偽りならぬ先達の
 誠を見る其上は鎌倉殿への恐れもな

し早々通行致されよ、ハア有難き
關主殿のお詔ヤイ強力め大檀那の仰
せなくば打殺しても捨てんす物命
冥加に叶ひし奴、以後をきつさ心得
居ろうと尖き眼にねめ付けたり、富
樫の助はつゝ立上り我は猶も嚴重に
誓固をなし義經殿を詮議致さん、い
かに客僧またの再會いざさらばく
く云捨てかなたへこそは入り
ける後に皆々安堵の思ひ又もや事の
なき内にいざ急がんぞ關守に暇を告
げて主従は虎の尾を踏毒蛇の口を避
れ出たる心地して關を後に先の關を
早拔群にほど降りて候間、此所に
暫く御休みあふするにて候皆々近

ふ御参り候へ心得て候、いかに申
し候扱も只今の氣轉更に凡愚のな
す業にあらす、只天の加護こそ思
へ、關の者共君をあやしめ生涯限り
有つる所に、兎角のせひをもんたは
すして我君を助る事我々の及ぶ所に
あらず、驚き入つて候、夫れ世は
末世に及ぶと云へ共日月未だ地に落
ち給はず危き難をさけたるも、全く
君の御武運を、神明佛陀の守護有る
印ハア有難しく去り乍ら敵を欺
く計略なれど正しき君を強力とする
さえも冥加至極と思ふ上、杖にて主
君を打咎め空恐ろしき天罪を受くべ
き我はいさばれど御痛はしき御身の

果さ、思へば上しこの杖は幾千貫の
かなえよりばるかに重き心地して日
頃きたひし此腕もしびれる如く覺
しぞと土にひれ伏し三拜九拜君を敬
ひ奉りついには泣の辨慶も一期の
涙を殊勝なり、ノウウく客僧達、
某先刻客僧達へ聊示を申せし段
役目とは云ながら、罪多くして面目
なし、夫故にこそ御後慕ひ、粗酒一
献勸めたく是迄持參致したり、イザ
盃を廻らせ給へ、早さくく進
むれば武藏坊心得て實にくはも心
得たり人の情の盃を請けて心を取
らんこや、是についても猶人に心な
くれそくれはどり怪しめられな方々

と、辨慶に諫められて此山影に一や
どりに、さゝりさまこいして所の山
路の菊の酒を呑まふよ、面白や山水
に面白や山水に盃を浮べて、流に
引るゝ曲水の手まづさへぎる袖ふれ
て、いざや舞を舞ふよ、元より辨慶
は三塔の遊僧舞延年の時の和歌、是
成、山水の落ちて巖に聞くこそ、な
るは瀧の水、エゝたべ酔ふて候程
に先達お酌に參つて候給へ候へ
しいかに先達一さし御舞候へ、さら
ば舞ふするにて候、鳴るは瀧の水
鳴るは瀧の水、日は照ることもたへず
こふたり、こくく立や立か弓の心
赦すな關守の人々、暇申さんさらば
よと笈を押取り肩に打掛け虎の尾を
踏む毒蛇の口を遁れ出でたる心地し
て陸奥の國へぞ下りける。

と、辨慶に諫められて此山影に一や
どりに、さゝりさまこいして所の山
路の菊の酒を呑まふよ、面白や山水
に面白や山水に盃を浮べて、流に
引るゝ曲水の手まづさへぎる袖ふれ
て、いざや舞を舞ふよ、元より辨慶
は三塔の遊僧舞延年の時の和歌、是
成、山水の落ちて巖に聞くこそ、な
るは瀧の水、エゝたべ酔ふて候程
に先達お酌に參つて候給へ候へ
しいかに先達一さし御舞候へ、さら
ば舞ふするにて候、鳴るは瀧の水
鳴るは瀧の水、日は照ることもたへず
こふたり、こくく立や立か弓の心
赦すな關守の人々、暇申さんさらば



酒屋の段

切 竹本 綴太夫
 豊澤 新左衛門
 後 豊竹 呂太夫
 鶴澤
 琴 野澤 勝芳

人形

親 宗 岸 吉田 小兵 吉
 嫁 お 園 吉田 文 五郎
 半兵衛 女房 吉田 玉 七
 舅 半兵衛 桐竹 門 造
 娘 おつう 吉田 文 枝
 美濃屋 三勝 吉田 扇 太郎
 茜屋 半七 吉田 文 作

艶容女舞衣

酒屋の段

今ごろは半七さんのさばりで知られてゐる世話物の粹であります。上中下三巻からなつてゐますが酒屋は下の巻の上巻町の段の切になつてゐます。書下しは安永元年十二月の豊竹座で、竹本三郎兵衛、豊竹應律、八民平七の合作です。この作の以前に實永年間に同じ豊竹座で『笠屋三勝廿五回忌』と名題して上場されてゐます。この段の内容を申し上げます。茜屋といふ酒屋の半七がお園といふ女房も有るのにもかゝらず昔馴染の美濃屋の三勝といふ藝子に迷ひ遂に人殺しまでする。お園の父宗岸

は舞の放蕩を怒つて一度娘を連れ戻したが再び考へるさころがあつて茜屋へ復歸させやうとする。半七の親の半兵衛も拒む處から事件が展開されて、お園の貞節や、捨兒のお通の守袋から現はれた遺書で一家が悲嘆するといふ人情の機微を穿つた場面がそれからそれへ連続く名作であります。

（床本）酒屋の段（切）

M こそは入相の、鐘に散り行く花よりも、あたら盛を獨寢の、お園を連れて爺親が、世間構はぬ十徳に、圓い天窓の光りさへ、子故に暗む黄昏時、主の妻は灯をさもし、表を締さ急々、出合頭に。詞ホ、是はく宗岸様、其處に居やるはお園じやな

いか。アノ母様、お替りもござりませぬか、言ふ挨拶も何處やらに、疵持つ足の踏途さへ、低き敷居も越兼る、宗岸は遠慮なく、詞半兵衛殿お宿にかこ、娘を連れて打通れば、妻は門の戸引立てサア、先づお上り成されませ、と奥底も無き詞の中夫と聞くより半兵衛が、一間を出る澁々顔。詞娘を連れて行かれたからは此方の内に用は無い筈、何の爲にござつた事さ、針持つ詞に妻は氣の毒詞イヤもふ人様に追従云はぬ偏屈な我夫、必ずお氣に障られて下さいますな、此間には嫁女の歸つて居られまして、いかいお世話でござりませぬナンノ、半兵衛殿の立腹は皆尤も、三勝とやらに心奪はれ、夜泊りして女房を嫌ふ半七、所詮末の詰ら

ぬ事さ、無理に引立行つたのは、娘に引を取らずまい爲儂が氣迷ひ、夫から思案爲るに付け、唐も倭も一旦嫁に遣つた娘、嫌はれふが如何爲ふが、男の方から追出すまで、取戻すさ云ふ理屈は無い筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひも、悔んでも跡の祭り圓めも晝夜泣き悲しみ、朝夕も勸まれば、若や病が起らふか、見て居る親の心は闇、儂も天満に年古ふ住んでゐれば、人に理屈も云ふ者なれど、誤りは訛れば成らぬも、年寄の顔押拭ふて来ました。何彼のことは了簡して、今までの通り嫁じやと思ふて下され、これ頼みます御夫婦と謝り入つたる挨拶に、お圍もうちうぢ、手を支へ、爺様の一徹で、無理に連れられ歸りしが、一旦殿御さ極ま

つた半七様に嫌はれるは皆私か不調法、鈍に生れた此身の科、詞今から随分お氣に入る様に致しませう程に猶且元の嫁娘さ、仰しやつて下さりませ。お二人様さ、跡は詞も涙なり詞オ、何のママ、其方さへ其心なら此方は變らぬ嫁姑。ノワ親仁殿、そうちや無いが。イヤそうぢやない。昔唐に例が有る。太公望とやらいふ人の妻、夫に隙取り月日を経て、訛言に來りし時、鉢の水を大地に覆させ、其水を鉢へ入よ、元の如く夫婦に成らんよ、太公望が云はれたよ、且外講釋で聞いて来た、夫さ丁度同じ事、此方の方から無理隙取つて、今更嫁と思へば、何時まで云つても返らぬ事、口詞叩かすさ、早う連れて退しやれ、と、膠もしや、り

も納戸口、顔も背けてゐたりける。詞才其腹立は尤もく、む、重々不調法は、此天窓に免じ了簡して、何卒嫁に、否でござる。忤めも勘當したれば、嫁と云ふべき者もない筈。サア夫も懇しめの爲當座の勘當。イヤ當座でない、七生までの勘當ぢや。ム、其又七生まで勘當した半七が代りに、此方は何で繩に掛つた。ヤアサア半七とは親でも子でも無い此方が、今日代官所で何の爲に、縛られて戻らしやつたか、思ひも寄らぬ宗岸が、詞に悔り驚く、女房、嫁も俱々立寄つて、肌押脱せば半兵衛が、小手を緩めて羽搔縮。ノウ情無や何事と、嫁はうろく、女房も取付き歎けば宗岸が。詞イヤ未だ驚くことがある、舞の半七は人殺し、お尋れ

者になつたわいのさ、聞くより二人は又悔り。夫は何故如何した譯、様子子に聞かしてコレ、半兵衛殿之間へども更に返答は羞俯いて詞なし。宗岸涙の目をしげたまき。詞一昨日の晩山の口で、善右衛門を殺したは茜屋の半七と、噂を聞いた時は、驚くまいか悔りせまいか、膝も腰も抜果しが、思へば不孝者、能い時勘當さしやつて、親に難儀の掛らぬは、未だ此上の仕合と思ふたは他人の了簡、違ふた此方の縛り繩、科極まつた半七も命、一日なりと延したいと人殺しの科を身に引き受、繩掛つた此方の心は、眞實心に子を思ふ親の誠と知れば知る程、宗岸が仕損ひ、半七の身の難儀、此方も勘當して仕舞ひ、儂も娘を取戻したら、親にか

ゝる首繩も無い、能い事爲たせ世間から譽める人も有らう、親さ成り舅さ成るが、大抵深い縁かいのう。斯う云ふ時宜に成つた時は、譽めらるゝよりは笑はるゝが親の慈悲、片時も早うと連れてきた心はの、一旦嫁に遣したれば、半七が厭むるならハテ尼にしてなせ此内で、御夫婦の亡き後の、香花なりとも取らして下され、コレ手を合して頼みます、訥言が叶はれば、引放されたと突き詰て、短慮な心も出し居るか、案じて、短慮な心も合す、母親は無し唯過して夜の目も合す、母親は無し唯一人、彼女を思ふ儂も因果、此方の繩目も半七が、科人に成つたら猶可愛かる、譬へ又勘當が定でも又離切つたが誠でも、眞實親子の肉縁は、切るに切られぬ血筋の親。儂も此方

程は無けれども娘は可愛い、まして勘當はせぬ娘、愚痴なこ人が笑はふが儂が可愛い不便でござる。これこれ聞入れて給へ半兵衛殿と、是まで泣かぬ宗岸が、堪へにこたへし溜々を、たくし掛たる叫び泣き、我強う生れし半兵衛も、舅の心根思ひ遣りオ、道理じやく宗岸殿と、跡はないぢやくり、妻もお園も一時に、四人が涙洪水に、樋の口開けし如くなり、半兵衛涙の内よりもお園が顔を打守り、何から何まで氣を付けて孝行にして給る。斯な嫁が尋れたまで、最一人と有る物じや無い、世間の人の嫁鑑、半七の事は思はぬが、其方に別る、半兵衛は、能々不仕合せ、退せむ無い、返しむ無い、さは思へども、此方に置けば此儘若

後家、儂は夫が可愛い。いとさうおぢやる。夫で訛言聞入ぬ、了簡して呼戻さぬ。これ嫁女、必ず酷いご恨んでばし給入なや。一人の悴はお尋ね者、翌日より誰を力にせうぞ。孝行にして給はつたが、今では結句恨めしいご、せき上げせき入る舅の脊擦るお園も正体なく、伏沈むこそ道理なり。半兵衛漸々顔を上げ、云はればならぬ事も有れど、孝行な嫁女の手前、胸に窒つて言ひ悪い、宗岸殿奥の間で言ひ明さん。これお園、其方を更々嫌ふぢやない、氣に掛けて給るなや、舅殿へ話す中、暫く爰にと三人は憎々奥へ泣き行く心の中ぞ哀れなる。跡には園が憂思ひ、かゝれとてしも鳥羽玉の、世の味氣無さ身一つに、結ばれ解ぬ片練の、練

返したる獨言、詞今頃は半七様、何處に如何してござらうぞ、今更返らぬ事ながら、私言ふ者無いならば半兵衛さんもお通に免じ、子まで成したる三勝殿を、疾にも呼入れさしやんしたら、半七様の身持も直り、御勘當も有るまいに、思へば、此園も、去年の秋の煩ひに、寧ろ死んで終ふたら、斯うした難儀は出来まゝいもの、お氣に入らぬご知りながら未練な私が輪廻故、添臥は適はずも、お側に居たいご辛抱して是まで居たのがお身の仇、今の思ひに比ぶれば、一年前に此園が、死る心が付かなんだ、堪へて給へ半七様、私や此様に思ふてゐるご、恨みつらみは露程も、夫を思ふ眞實心、猶彌や増る憂思ひ。詞翌日はさうから父様に

又連れられて天満へ往に、半七様の不
圖した果敢ない便りを聞くならば、
思ひ死に死ぬて有る、世も浮世は立
ぬ覺悟嫌はれても夫の内、此家で死
ねば後の世の若しや契りの綱にもこ
果期を急ぐ心根は、餘所の見る目も
いぢらし、斯る哀れも知らぬ子の
合泣く聲に目や覺ましけん、一間を
出て、乳飲まう、乳が飲み度いおば
くく、お園が膝に寄添ふ子の
顔見て恠り抱き寄せ、詞ヤア其方は
美濃屋のお通じや無いか、爰へは如
何して在つたさ、不審ながらも抱上
ぐれば、半兵衛宗岸母親も一間の内
を轉び出、詞オ、これ、嫁女忝
ない其心、障子の内で聞く度に、拜
んでばかりゐたはいの、禮云う事も
澤山あれど心の急くは此子の事、美

濃屋のお通さ云はしやつたは、半七
さ三勝の。アイお二人の中に出来た
お通さ云ふは此子じやわいな。ヤア
親父殿聞かしやつたかオ、聞いて
居る、其又お通を、ナ、何で
捨子にしてト此地へ越した是や理由
が有らう、嫌懐か何所ぞに、書い
た物でも無いが、早う尋れて見や
言ふ内に、わくせきあくる守袋、
内よりはらりと落たる一通取る間遅
しと封押し切、詞ヤア何ぢや、書置
の事さ書いて有る。ヤア、これ
嫁女其方の好い目でちやつと讀
やく。アイ、ナニナニ十度契
りて親子と成る、父の恩は山よりも
高きこの世の教、我身にも辨へ居候
へども、其御恩も得送らず、儘なら
ぬ義理に搦まれて、心にも有らぬ不

孝の罪お赦し下され度候、別て母様
の御養育。申しお前の事でござりま
す、能ふお聞き成されませい、オ、能
ふ聞いてゐますわいの。唄、聞い
てゐるさの障子より、洩れ出る月は
芽れど胸の闇、合詞エ、時も時と隣
の稽古、然して其跡は、何と書いて
有るぞ、アイ母様の御養育海よりも
深き御恵み、親父様御機嫌悪い時に
は、蔭になり陽になり、幾千萬のお
心遣ひも、泡と消行く我難儀、人を
殺せし身と成り候へば、思ひ設けぬ
御別れ。詞ア、夫なら矢張半七様は
オイノウ嫁女、善右衛門を殺しまし
たわいのふ、ハア彼善右衛門と云ふ
奴が、大抵や大概、悪い奴ぢや無い
わいの、彼んな悪者でも喧嘩兩成敗
我子の命を解死人に取らる、と思へ

ば思へ宗岸殿、口惜いわいのく、

無念にごさるゝ述懐涙見聞くお園は

以前の剃刀、南無阿彌陀佛の覺悟の

体、是はと驚く、母、宗岸叶はぬ手

にも半兵衛は、漸々押へて、これ嫁

女、詞寄ばかりを跡に置き、死な

うとは胴総ぢやはいく。エーこれ

が死なすにゐられませうか、放して

殺して下さんせ。オ、娘、尤もぢや

くくわい、ア老少不定の世の中

と、聞流したも今身の上、みづく

とした若い者、義理に迫つて死ぬる

と。ノウ半兵衛殿宗岸殿。思ひ廻

せば廻す程ナエ、口惜いわいのく

唄 鷺鷥の片羽のそばく、子

に迷ひ行く小夜千鳥、無残や半七は

今宵限りの命ぞと、三勝伴ひしほし

ほこ心に掛る我子の顔、名残にせめ

て今一目と、俱に戸口に夜の鶴、内

には夫と白髪は母、心なられど書置

を又取上て讀む文章。詞人を殺し一

日も、生長らへる所存はなく候へど

も、お通と申す娘一人ござ候て、殊

にかよはき性質、不便さ餘る親心、

夫に心引かされて、今日まで長へ

候へども所詮助からぬ身に候へば思

召、雀みずお通を遣はし候ま、私

の小さく成しと思召され詞ぞれく

婆見しやいのくエ、私の小さく成

しと思召され御養育のお世話の程く

れく頼み上候。子を持つて知る親

の恩と、お通が不便さいぢらしさに

お二人様の御恩の程、猶更此身に浸

み應へ有難存奉候、又々心掛は

親父殿の御勘當相果候後にも、お

救し下され候様、母様宜敷お執成、

是のみ黄泉の障に御座候々々々、オ

道理ぢや道理ぢやくく可愛や

泣撃洩るゝ表には、半七が身に應

へ斯る歎きも我故と、思はれ今更空

恐ろしく身を悔んだる男泣、袖や袂

を嚙締々々、泣く音止むる憂き思ひ

此方はお園が猶涙、泣々取上ぐる書

置の、讀むも果敢なき世の中に、詞

女は其家に在つて定まる夫一人を、

頼みに思ふ者に候處、其頼みに思ふ

我等がみもち、いつしか愛想らしき

辭も掛す、終に一度の添臥も無候へ

ども、其色目も致さずして、親達大

事夫大事と、辛抱に辛抱成され候段

山々嬉しく存じまゐらせ候。今まで

すげなふ致せし事も、更々嫌ふでは

無候へども、三勝さばそもじの見え

ぬ先からの馴染にて、子まで設けし

中に候へば互に退去も成り難く、夫故疎遠に打過まぬらせ候。併し夫婦は二世と申す事もそふらへば、未來は必ず夫婦にて候々、詞あり是やまあ誠か半七様、こりや、い娘、未來で夫婦と書いて有るか、いやく、アイ、未來は未來ぢやが、一日なり此世で女夫にして遣り度い。何としてマア此半七は、善右衛門を殺しましたぞ。ごれ、娘最少ごじやごれおれが讀みませう。兎角不孝の我等に候へども、死後には無やお二人や、宗岸様の御歎き、随分々々力を付け此身に代りて御孝行に成し下されべく候。申し殘し度き事どもは數々候へども、涙に字性も見え難く、あらあら惜しき筆止申候只々お通が事のみ頼上候。此上は亡人後の

お念佛、南無阿彌陀佛々々々々々々、讀み終らす宗岸親子、又俯沈めば半兵衛夫婦、お通を中に抱き上げ初孫の顔が見度いと心に思へど世間の義理で是まで逢も見もせなんだ、斯う言ふ事さ知つたらば、顔見ぬ内が増しであつた。愛らし盛りの此お通、半七と一緒に暮すなら飽い樂みで有らふ物、これ婆見やいの、あれ何にも知らず手打やあは、ばつかりオイノ是や孫よ、モウ父も母も無い程に、此婆と一緒に寝いよ、さばいふもの、乳も無く、今から先の寢起にも、無や歎かん親が、知らずにおるが脚怒者、惨い心いぢらしやと、言ふ聲洩るゝ三勝が、思はず乳房を握り締め、詞、乳は爰に有る物を飲まして遣たい顔見度い、乳が張るわい

のうと、身を慄はせ、駈入らんにも關の月に空音も成らず羽拔鳥、親は外面に血の涙、子はやすかたの安からぬ、悲しき迫る内と外、一度にわつと湧き出る、涙浪花江泉川、小き人を汲出す如くなり半七は齒を嚙締め斯ばかり深き御情、是非もなや勿体なや、不孝を赦させ縮はれと、悔み歎けば三勝も皆成故の御事さ、俱に詫入る中に半七、詞、何時まで泣いても返らぬ縁言親父様の御細目、早う解くは身の最期、イザ、急がんなサアおぢやと立上りしが、今生の別れにせめてお顔をさ差し覗けば三勝も、お通を一目と延上り、見れども親子隔ての關何と千萬無量の想ひ、両手を合せ伏拜み、合おさらば合、云ふ聲も歎きに埋む我家の中

見返り〜死に行く、身のなる果ぞ
哀れなり。半兵衛はつこ心付き。詞
此書置の文体では、今宵最期さ決め
し半七、宗岸殿も手分して行衛を尋
ねん、サア早ふ〜〜と身づくる
ひ、立出んとする所に、思ひ掛なき
表より、詞ヤア〜方々、善右衛門
を殺せし咎人茜屋半七召捕つたりと
呼はつて庄九郎に繩を掛、立出る宮
城十内、詞半七が殺せし今市の善右
衛門は、國元にて用金を盗みし盜賊
召捕に來りし處、一昨夜半七に殺さ
れし由、則ち善右衛門の同類たる庄
九郎を召捕り、彼が白狀にて半七親
子に利無しと、立寄つて半兵衛が繩
目解けば四人が悦び、夢では無いか
と伏拜み、詞これ〜〜親父殿、
十内様のお情で半七も命助かるぞ、

のう、何ぞ命の有る中に、止めて下
され半兵衛殿さ、急るを聞いて十内
が詞半七は死に出たこや、エ、遅
かりし残念々々、役目なれば心に任
せず、夜明ぬ中に早お行きやれと、
十内も花も實もある櫻井の、掟和
ぐ國の名も、大和五條の茜染今色上
し艶姿其三勝が言の葉を、爰に移し
て止めけれ。



播州皿屋敷

青山鐵三館の段

青山鐵三館の段

切

後

竹本大隅太夫
鶴澤道八
竹本和泉太夫
竹本綱右衛門
鶴澤友之助

人形

青山鐵三 吉田榮三
早瀬三平 吉田玉松
青山忠太 吉田玉市
有 助 吉田玉徳
若殿巴之助 吉田文之助
腰元おきく 吉田文五郎

寛保元年七月十五日豊竹座初演、上中下三巻に道行を含み作者は淺田一鳥爲永太郎兵衛豊竹越前少掾む勤めてゐる。江戸番町の旗本青山主膳が秘藏の皿を預る召使お菊の過失でその一枚を毀したことから残忍極まる責折檻し無念のお菊の怨靈に惱まざるさいふ巷説を主材に世界を東山時代に取つた作品であります。播州姫路の城主細川家を横領せんもの之山名宗全は細川の重臣青山鐵三を一味に引入れ、殿を毒殺せん謀ります。この企てをお菊に知られたのでお菊の預る重寶十枚揃の唐繪皿を一枚盗

みその紛失の科でお菊を責殺します皿の詮議に執念を残したお菊は死靈となつて鐵山を惱まします。お菊の夫三平はお菊の靈にひかれて青山兄弟を討て、紛失の皿を取返すさいふ文樂座久方振の上演で御座ります。

(床本) 青山鐵三館の段

播磨がた名さへ媚く姫路の城下、五軒屋敷の一構へは、御家老青山將監鐵山が下館、がたの珍客さて等閑ならぬ儲の亭築山花鳥泉水の流れ涼しき夏の景、切戸を隔てこなたには主將監、燕居の間、くれ椽先の踏櫃飛石苦むして、古井にしげる虎耳草しやれ木の井筒はれつるべすてた物好奥深く故有げなる住居なり、されば鐵三兄弟が胸の工みは木影なる、

智、あの泉水へ毒流しとはコレ究竟の御術、善は急げぢや、此隙にこの器を携てかけ行く向ふへお菊がすつと、忠太様待しやんせ、ヤアあのそなたはお菊ぢやないか、シテ今のを何ぞ、ハイ聞たでもなし聞かぬでもないか何は兎もあれ、お泉水へそんな物を流さふさは、マ譯もない事さしやんすな、エ、イヤサ是は物でおじやる、物とは何じやへサア是はサア、忠太さん、何でござんすへ、ア、いやさコレハ、コリヤヤイお菊、かふだはやい、此間の雨續きに、お泉水が濁りし故若殿のお身には毒じやと思ひ典薬が調合せし水澄しの妙薬、水の毒を流せといひしをあぢに聞きなし、氣の廻りしはチ道理、誠しやかに言

廻せばコレハマア、本にわたした事、モ何を聞やら、聞きはつて今の様に申たがお氣にさはらげ御救されて、下さんせ、ホ、い、こ會釋する、ホ、ウ疑ひ暗て満足シテ御皿を持參致せしか、忠太は早く望に任せ、御皿を拜見致したし、それ手水と氣を付けば氣轉も菊も淺からぬ井筒の元に立よつて、手もさもゆらに汲上げる、釣瓶を忠太が取上て清めの手水を結ぶ間に鐵三は帛紗開いて紐ごとく箱の内なる御皿をそつと一枚懐へ隠し手早く直し置く、お菊は何の氣も付ず後は我身の敵ともしらぬ心ぞ是非もなき、さあらぬ体にコリヤ、お菊ソレ太切の御皿なるぞ念の爲數を改め其うへで兩人共拜見せん、早ごとく、鐵

三が指圖にお菊お、忝しく包みし帛紗打敷て蓋押開き御皿を帛紗の上に一枚づゝ讀ならべてハテめんよふな たつた今御前で箱の鉄は夫にかはつてわたしが明る内の封印は殿様の直にお切り遊ばす、其上ごとくわたしが讀て受取てまありしは恰度十枚揃ふてあつたが一枚足ぬはハテ不思議な箱を捜しつ傍りを見廻し立たり居たりうる、するこそ道理なれ、鐵三わざと驚く面色、ヤアケ程太切なる御皿をナニ足らぬといつて事が濟ふか、いよくなくんば女其方も命もないぞよ、エ、さはマ、横着者めがと、きつば廻せばア、いや、若人お待なされもしも殿の御前に取残してあするまいものでもない、ソレ菊ちやつと見ておじやれと、色に

引かるゝ肩持顔チ、ほんにそふぢや御前へいて、何處へ、ヤア女め動きあがるな、御前へはソレ忠太其方いて、エ、早く行けエ、早く行吟味せよと厳しき詞に是非なくも忠太は立て入にける、ヤアおのれ大膽女郎め爰にない皿が何の御前に有るもので盗んでも盗まいでも足ぬからは、おのれが科、但しは又さばついで打め

いだが、サア真直にぬかしおらふ、ナフ悲けないお疑ひ太切ない御皿を何しに私に破り盗も致しませふ、是が見へれば私に難儀ばかりじやない、一枚足りない殿様や三平殿の身の難儀もお家の大事になるはいな此上のお願ひには、どうぞ念げらしに今一度改まして下さりませお情けお慈悲と手を合せ、かこち歎けば

ヤアごくに立ぬよまい言左程に思は、ソレ手ばしかく讀で見よ、鐵三是にて敷取するさ床几にぎつかさ腰打かけサアよめアイ一つ二つ三つ四つ五つコリヤ、女五枚はそれでモウ濟だゾこれから後はモウ五枚性根をすへて、早くよみおれ、アイナ六つチツト六枚七枚、八枚、九枚、ハア早く讀め、アイナ、テモめんような何がめんよふ幾度讀でも同じ事皿が足ればうぬがそつ首討放すにサ誰點の打人がある、但しは又此鐵三が無理だと思ふか、ナンノさらさら無理さは存じませぬ殿様の御前では急度揃ふて有た物が爰へくるまでに足ぬさいふは、私が因果でばりませう、チ、其合點がいたらばめるゝとさこぼへずさ、念佛申して観念ひるげと刀をすばと抜放せばまあ、待て下さんせ、スリヤどふ有ても殺さしやんすか、くごい、鐵三様、そりや餘り胸欲じや、モ死る命は惜まれど、失たる皿の詮議もせず此儘死では殿様ばかりか夫の難儀そればかりが思はれて、わしや何ぼでも死とむない、命がおしいコレ、マ卑怯ではないいな、どうぞ最一度あの皿を讀直さして下さりませヤアしつこい願ひ叶はぬ、未練者めさ飛か、り取て引よせ弓手のあばらア、い、どうよくぢや鐵三様、あの皿ゆへに夫婦の者が是までいくせの苦勞せしかひもなふ失ふた誤りあれば殺される命はさら、惜まれども後に残つて我夫の難儀さしやるがエ、わしやいさしい

わいのふく、此儘やみく、死る共、
魂は我夫の影身に添て御皿の詮議
をせいで置ふか、ア、此譚がたつた
一言逢て言たいマけふにかぎつて三
平殿はなげに遅いぞ此世の名残りに
今一度顔も見たい、逢たいはいな
暫しの情に鐵三様さめを待つて下さ
んせごふぞ今一度あの皿の數が讀た
い、今のは胸にせまる思ひの數々
々をかぞへ立、歎き苦しむ其有様
目も當られぬ次第なり、ヤア長ばへ
ひろぐな叶はぬと又を抜は血は瀧津
瀨、よろばひまはるを切伏、こゝ
めの刀、此世を早く秋の菊、散行身
こそはかなけれ、まづ邪魔は片付い
た末期の水は勝手にくらへ、傍の井
戸へ死骸を打込血刀引提泉水の汀に
立寄しづ、こ血汐を洗ふ其處へい

きせき出くる弟忠太ヤア扱はお菊
を手にかけられたかチ、サ太切な御
皿を失ふた科イヤサテモ本人の菊を
殺してマ誰を詮議の手がかりに、フ
ー、ハ、ハ、ハ、ハ、我年來の望を遂
主君の家を横領する共此皿がなくて
は叶はぬといふ事汝、こまきに習はふ
か、毒害の一大事を女めが聞た故落
度を拵へ殺して仕廻ふ鐵山が謀、
隠して置た一枚の御皿はコレ爰にと
取出し見すれば横手を打ハ、アそふ
さはしらいで若殿諸共御殿を一遍尋
ねても、なかつたこそ道理、兄者人
適れ、細川家の重寶此皿が手に入
からは大望成就、コリヤシイ、今に
も三平めが來りなばお菊を殺した身
の言拔、其皿はやはり九つ此一枚は
身が所持するぞ椽先の手拭取て押包

み懐中すれば時に怪しや梢に風あれ
勢動して釣瓶の上に燃上る、いんこ
んたる心火の光り、井筒の中よりお
菊が聲、ノウ申し鐵山様其皿を今一
度どうぞ讀せて下さんせと聞より忠
太はぎやつさばかりノウ、こはや
こりやたまらぬ救せ、もわななき
聲、後をも見ずして逃てけり、さし
もの鐵山ぞつこ身の毛も立上り奥の
間さして行んさすれ、後髪引戻され
てたち、家鳴震動空かき曇
り俄に降くる雨のあし、何處へ逃入
も眞の闇方角わかぬ死靈の業、鐵山
は只呆然とあきれ果たる井筒の本、
ありしにかはらぬお菊が姿かげの如
くに現れ出、のふ恨めしや鐵三様其
皿を今一度讀改めず殺されし恨は誰
に報はふぞや一つ二つ三つ耳を突抜

く猛靈の聲をしるべに切拂へばかき消ごこく井筒の上にくはつこ燃立つ猛火の煙り、咽んで鐵山かつげさ伏ば八つ九つハア悲しやま叫ぶ聲、障子に響いてびりくく庭の木草も動揺し雨はしきりに降しきる。

かゝる折しも船瀬三平武經は主君の御機嫌窺ひと廣袖合羽高足駄忠義に心紅葉傘、横ぎる風にこられじと足もいせせき歩みくる、向ふに鐵三雨にひら打てコリヤごぶちやお目でももうたかコレサ鐵三殿くヤア三平殿かホイマよふこそお出扱々俄に持病がおこつて、それは御難儀拙者も今日は冷光院様の館へ召れそれ故延引致したが殿の御機嫌はいかゞでござるなイヤモ氣遣ひめざるな御機嫌すんさよいの貴殿もさぞお草臥もお

出の様子ば某が宜く申上人、サアく是から直にお歸りあるご己が悪事を隠さん為あせるにかひも嵐につれ、一つ二つ死靈のかぞふる聲に連れ、自然と三平心にこたへハテ心得ぬ、見ればあれにお家の重寶唐繪の皿算ふる聲は正しく女房、聲ばかりで形の見へぬはチ合點が行まい、十枚揃ふたあの御皿一枚盗んだ科によつてお菊は某が手にかけたはいヤイ、何んぞ、スリヤヤ、女房は殺されたかハアハテナ響へ御皿が失たりさて評定詮議にも及ばす理不盡に菊を手にかけ左程の事を押包んで某をいなしたがるはムウこりや鐵三其方に詮議があるはい、ぬかしたりヤナ評定もへちまも入らぬ皿がたられば預りし汝も科、女めご同罪

遁れぬ覺悟ひろげご抜かくる、手先をしつかごイヤサコレもき召さるな詮議のかゝつた青山鐵三、骨をひしいでも言はさにや置ぬ胸の一物、一々残らずサアく白状くご襦袢せ折て詰かくればさしも不敵の鐵三も懷大事さうぢつく身がまへ見て取り三平扱こそお身が懷中にご突込腕先もぎ放しするつご抜けて切付る傘をすぼめて丁ご請け、引けば開き襦袢を拂へばひらりこかはし何れ劣らぬ早速の働き、空には雨風ばらばらばつご燃立つ炎の中、又もやお菊が聲ありく微塵になさんご切りくるを無刀であしらふ三平が加勢は妻の怨念力なんなく付入り鐵山が、脾胃をちやうご死活の當身うんごのつけに反かへるを足げに蹴さばし大音

上チ、悦べ女房十の都合はコレ爰に
と鐵三の懷より皿取出し妻の敵を
一時に思ひしれやと突込刀さし通さ
れて七轉八倒むくひは早き鬪未魔、
心地よくこそ見へにけり、一間の内
より巴之助立出、ホ、い、今にかは
らぬ夫婦の忠節、いつの世にかは忘
るべき、某ふたゝび世に出なばお
菊が靈はこの姫路の十二所觀現の、
宮居の内へ勸請せんぞ残る方なき仁
愛の仰にはつとありがた涙、今の世
までも隠れなき少彦名の御社に菊の
宮とて名に高く筆に寫せし皿屋敷古
跡を殘して立出る。



尾山大尉出征の場

豊竹つばめ太夫
豊澤仙 糸

人形

尾山 大尉	吉田 玉松
父 與三次郎	吉田 玉次郎
娘 鈴子	桐竹 紋司
大尉妻 かね子	吉田 文五郎

大阪朝日新聞所載
食満南北脚色
鶴澤友次郎作曲
上海戦秘史
そのまはろしちくらにつき

其幻影血櫻日記

尾山大尉出征の場

天下道あれば走馬を却けて糞車を用ひ天下道なければ戎馬郊に生すこかやされば隣邦道にそむき上海の變こゝに起り出動の命九師團の七聯隊は勇み立つ中にも尾山豊一大尉不治の病にかかり舟楫さへ儘にならぬ身も現役の勤め出動をばげます父の與三次郎名に大野町往來に往きかふ旗は出征を祝す萬歳歡呼の聲思はずさそはれ尾山父子一間を立出て表を見やり、詞豊一お前あれを聞いたかこの大野町からも大分に出征するも

のもある何と云ふ仕合せな事であらうわしも昔日露戦役に従軍して名譽の凱旋をしたものだお前も必らず手柄してめでたう歸國をまつてゐるぞハイお父さん私は云ひ甲斐ない事ですが幼年學校當時から胸膜炎で佐々木先生からもいろ／＼と注意を受けて居ります、それでは又病氣が起こつてゐるのか、イエさうではないのですがナアニ自分は病の爲に倒れたくはありませんすでに林聯隊長殿空閑大聯長殿からも命令は受けて居るので自分ばかりはお父さん同様立派に名譽の殊勲を立て、無事に歸國いたします、しかし無事に歸國などさいふ言葉は軍人の出征に望み口にすべからざる事かもしれませんが御兩親始め妹のお咲又妻のかれ四つ

こ二つの姉妹、この家庭は誰か見て行くので
 せうお父さん自分は命を二つにつかつて、
 きつこ勳功を立て、歸ります御安心下さい
 健氣に云へど心には是今生の別れぞと、口
 に云はれど此身にて何の凱旋なるべきぞと
 のみ込む涙一間より妻はぐわんぜも泣く兒
 をかゝへ、あの賑やかな萬歳の聲もしあな
 たもいよく御出征なさるのでふりますが
 フム自分は第七聯隊第五中隊長として上海
 へ出征する父母の事、妹の事さうして二人
 の子供の事一切お前に頼んで置くぞ、イエ
 おまち下さりませ佐々木先生のお話ではも
 し大尉が戦地へお出でになれば御持病が再
 發して取りかへしのつかぬ事にならうそれ
 に此頃は胸の痛みを押しかくしさあらぬ跡
 も騒はがしき事變の前にいたつきを包む心
 を押はかる、ごうぞ師團へお届けして留守
 の部隊へ編入のそれも病の爲ぞかし必らず

卑怯と思はれなごくれ、この御心づけト
 云ふに與三次郎膝すいませ、初めて聞いた
 此頃の容態名譽も報公も何も彼も第一は命
 が元手、イヤお父さんコレ兼子お前も何を
 云ふのだ醫者は醫者の職務そんな事を云ふ
 ても今は非常時だそんな常識な判断によつ
 て行動がされるものか莫迦な、イエ、今日
 日は昔とは違ふておりますわれから灯に入
 る難治の重病御國の爲は云ひながら動き
 も儘に情なや何のお手柄立てられうせめて
 は醫師のお許しまち御出征も遅かるまじま
 づそれまでの御養生もや不忠と云はれま
 じこのいたいけの子供まで父のない兒にな
 されうとか御分別をささしつくる夫を思ふ
 まごころに争さふ妻と不慮さは見やれどわ
 れも戦場に屍をさらし國恩の萬分に報ぜ
 んさかたき決意もそれぞさあかしかねた
 る心の苦るしみ、いたいけな手に軍刀をか

いかにの趣情風華浪

〜 理料泉温一南

理料泉温一南 のまさなみ

一七〇七・五南
 一九二五・二三一長西
 番 〇 三 六

…は用御の計電お



御宴會日は
 まづ！

四少

嚴家楷戰鬪の場
江灣鎮塹壕の場
南京衛戍病院の場
空閑少佐自決の場

空閑少佐	竹本鏡太夫
尾山大尉	竹本相生太夫
甘介瀾	竹本相生太夫
鈴木中尉	豊竹呂太夫
小林特務曹長	豊竹つげめ太夫
支那那兵	竹本淀路太夫
支那那兵	豊竹辰太夫
支那那兵	鶴澤友次郎
支那那兵	鶴澤福太郎
支那那兵	鶴澤友次郎

人形

空閑少佐	吉田榮三
鈴木中尉	吉田玉幸
尾山大尉	吉田玉松
小林特務曹長	桐竹政龜
甘介瀾	桐竹紋十郎
兵士瀾	大桐竹紋十郎
支那那兵	大桐竹紋十郎

八雲
鶴澤友次郎
鶴澤福太郎
鶴澤友次郎

き抱きたる姉の鈴子父の前に手をつかへお父さまおまへは戦争に行くのかや嬉しいくも四つになる兄の健氣さに互ひに顔を見合はして勵まされたる父の聲豊一家庭の事はこの父が引受けた必らず後顧の憂ひなくお國の爲に思ふ儘働いてくれよ、左右の袖に妻と兒がもりつく二世と一世の別れ又もや聞こゆる萬歳の聲にスツクと立ちあがれと思はず咳きくる胸のなやみゴホン／＼、アもしあなた、エイお前は軍人の妻でないか、ハイお父さん行つて参ります、立派な戦死を、エツ、イヤ戦地では身をいさふてくれ、ハイお母さんにも妹にもお目にかゝれないかもしれぬさお前からよく傳へて置いてくれ、ハイすいぶん御無事でオツ萬歳

を唱へて出征するぞ、さらば／＼と立上り振切り出づる我家の軒萬歳の聲悲壯の別れ泣く末の兒のあはれの聲あまに見捨て、出で、行く。

嚴家楷戰鬪の場
江灣鎮塹壕の場
南京衛戍病院の場
空閑少佐自決の場

はや戦端は開かれぬ連絡絶て敵陣へふかくも乗入る空閑少佐左右股肱はすでにばや大半斃れのころはわづかに三十有餘不眠不休の戦ひに苦闘はつゞく三日三夜叢の敵兵斬拂ひ副官／＼ハイ鈴木中尉まだ生きのこつてゐたか、ハイ逆襲の敵は追拂ひましたシテ尾山大尉の一隊はごふした恐らく、例の胸膜炎それに肺炎さへ併

發したそうですから敵彈よりは病に倒れたと思ひますフムさうか林聯隊長殿の身邊も甚だ危険だ各隊の聯絡のされない事は残念だ。それに兵も三日に涉つて絶食です逆襲又逆襲殘餘の兵もわづかです大隊長殿チ、今も最期だハ、ハ、鈴木中尉ハイわしはわしの父から幼年の頃葉かくれ論語を教えられたこれは佐賀傳統の武勇に鍛えた武士の爲に作られた金言集だそれによるさ後日死期を早まつたさ云はれても武人の面目は死すべき時に死ぬのだ死に遅れたさ云はれるよりは遙かにまさる筈だ副官ハイ佐賀論語の生きて働く時が来たぞハイ敵陣へ斬込んで湊川に於ける大楠公の壯烈の最期を見ならふのも愉快だナ大隊長殿オツ大日本帝國の爲

だ鈴木中尉一步も退くな昭和七年二月二十二日我等の骨は殿家楯に埋むのだ全員突撃あら無惨恨みをのこし敵中に屍をさらす空閑少佐それと見るより馳けよる敵兵ヤツ日本鬼子／＼ヤツ戦死してゐるあるかよるさ起きて斬られるよくないあさへ／＼イヤ大丈夫ある死んでは日本の大將も斬るこまないこれなら大丈夫ある捕虜にして手柄にするヤンデーたくさんくれる事あるなうつかりよつては恐ろしいことある、リイベンタイズ恐ろしいぞ／＼大丈夫ある／＼皆がヤ／＼と打寄つて擔架にく／＼し月くらき木の間へはこぶぞ是非もなし

中隊は敵兵の重圍をうけて難戦苦闘七十八師を目前に糧食つきて二日夜連絡絶えし孤軍の奮闘中隊長尾山豊一眞近く敵彈炸裂の音にムツクと起上り潤わき切つたる聲はりあげた誰かゝるかハイ居ります誰かハ小林特務曹長であります中隊長殿お氣がつかれましたかチ、小林自分は熱のために殆ど夢中だつたア、濟まなかつた小林ハイ敵の砲彈は聞ゆるがナセ味方は應戦しないのだハイ中隊長殿我軍は既に彈丸はつきましたナニ彈丸がつきたかハイシテ糧食はハイ糧食も水も一切つきたのです、ム、さうか何にしてもこの重圍を切ぬけて空閑少佐殿の大隊と連絡をせらなければならないイヤ中隊長殿いけません、あなたは非常な高熱です動い

てはいけません何だ何だこれしきに何をい
 ふのだイエ中隊長殿危険です熱の下るまで
 塹壕にお出で下さいエ、馬鹿ナ自分は戦線
 での死を決して出征したのででも中隊長殿
 は御病氣です御重体です病氣が何だサア進
 むのだイヤ塹壕にゐて下さい頻りに敵が狙
 ひ打をしますあんなヒヨロ／＼の敵弾が當
 るものかイヤ危険です、エイ生きのこつた
 兵を集めてくれ、ハイエ、上官の命令を背
 くのかハイはつと答へて小林はかしこへ急
 ぎ走り行く又もや熱のさしぐちにウン／＼
 大地にまるび身を悶え正氣は何ぞ
 有明の空に不思議や前線にあるべき筈の鈴
 木中尉正体何ぞ尾山も前スツク立つて尾
 山中隊長殿、夢があらぬか呼ぶ聲の耳に
 通じてオツ空閑大隊長殿の副官鈴木中尉か
 ハイ残念ですごうした、大隊長空閑少佐殿
 は戦死されましたエツ爾後大隊一切の指揮

をこつて下さい前線は全滅ですもう指揮す
 る者も一人も居りませんお願ひしますオツ
 大隊長殿は戦死されたかム、残念だダダ
 大隊長殿鈴木中尉、ゴホン／＼中隊
 長殿残餘の兵を集めました中隊長殿、お
 氣がつかまりましたか、小林残念だ大隊長空
 閑少佐殿は戦死されたぞ、もう連絡の道は
 ない徒らに重圍を衝いて多くの兵をみだり
 に敵地の土ま化せしむるよりは、一旦戦場
 を離脱して天樂寺の本隊へ引揚ぐるのだ、
 用意せい早く／＼ア、イヤ中隊長殿敵は空
 閑大隊長殿の仇です、進んで彼等と戦ひま
 せう、皇國の兵は後退するのは不名誉です
 イヤ再擧をはかるのだ飛んで灯に入る愚策
 を敢てしないのだ各兵あこへ熱が言はずか
 幻覺錯誤これぞ不思議の運命にあやつられ
 たる悲壯の變事涙は土をぬらせども上司の
 命令是非なくも恨みをあさに引あぐる

大 阪 御 池 橋
茶 筍 車
 電 話 新 町 三 六 番

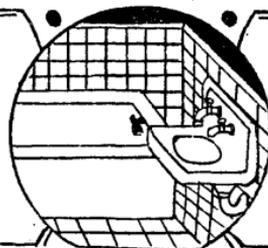

實に運命のいたづらか南京へ引かれたる空閑少佐は敵將の甘海瀾に助けられ身は浮草の岸近く折しも外におさなふ聲、空閑少佐殿お眼覚めか甘少佐です傷の痛はありませんかチ、甘少佐殿僕は殿家楷の激戦に倒れ人事不省のま、捕虜となりこの衛戍病院に收容せられ恥をしのぶこの日夜親身も及ばぬ貴下の配慮空閑昇感謝の外ありませんイヤそれは貴國に於て日本陸軍の教えをうけた甘ですお助けしたのも所謂東洋精神と云ふのでせう武士は相互ひですア、有難うしかし空閑は却て此情けを受けたくはありませんでしたお察し申ます、今日わが部隊への報告に第五中隊長尾山大尉は前進の指揮をあまり多く部下を犠牲にしたる自責の念に堪えず自殺を計られたさの確報がありました、ナニ尾山大尉は自及したか、フーンしかし貴官も當衛戍病院にて幾度も自殺をばかられたがいづも私は少佐殿を保護

して居りました。感謝します僕は敵の情で生きてゐる事は鐵丸を呑むよりもつらかつたです、甘介瀾殿これを見て下さい渡す一書を手に取り上げ我運拙くして負傷さりこなる武人の不名譽これにすぎず名を惜む是則ち武士道我は武士の本領を忘れずア、お立派なお覺悟です、しかし折角快方にむかはれたのです少佐殿貴國の爲に命を大事にして下さい自分は明日日本隊へ歸ります、お國元へ御用あればこの甘まで遠慮なく申し置下さいハア有難うではこれでお別れ致します互ひの握手暮山の雲か涙の雨又逢ふ時も敵味方四鳥の別ればはれなる

M かりの世をからくに人の情けにてけ

ふもむなしく暮しつるかな
アけふは彌生の下八日聯隊長林少將閣下には我軍との連絡の絶えた爲又我軍は尾山大尉の中隊を呼應の出来なかつた爲、ア、聯隊長殿はこの殿家楷で討死されたのだ聯隊長殿空閑は恥をしのんで戻りました私は武

化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化装置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋

岡部商會

阪急 夙川
電話新町 一六二七六

岡部商會支店

電話新町 一九七六

四ツ橋

よ
り
消
息
日
誌
七
月
の
文
楽
座

△七月一日

文樂お祭り月興行の初日開場。

△七月二日

全市小學校教育家鑑賞會を催しました。

△七月三日

大實分團の方々の第六回總會を催され皆様記念撮影をされ充分歎を竭されたやうでありました。

△七月五日

全市教育家鑑賞會開催。

「文樂を知る會」の鑑賞會開催。

△七月七日

全國工業組合大會懇親會場として、多數の全國斯業の關係者をお迎へしました。

△七月十日

日本染料製造株式會社の觀劇會が開催されました。

△七月十三日

大成駒家鷹治郎丈がお見えになりました

△七月十四日

滿洲國溥儀執政の御弟溥傑氏と執政妃鴻秋妃の御弟潤麒氏は井上周氏の案内で甲子園ホテルより御來座堀川猿廻しの幕切を御見物の後特別室で記念撮影をされました。



現
代
的

電話 戒三七五六番

△七月十七日

明治生命の観賞會が開催されました。

名古屋

四日市

△七月二十日

人気を湧立たせたお祭月興行も連日盛況裡に終演の幕を閉じました。

太夫は相生、呂、つばめ、南部、小春の五人を始め新鋭三絃はそれ／＼相役も若手揃、人形は紋十郎、玉幸等。

——八月の消息——

文楽座定期興行の休演を利して、若手連が五人會を結成して地方巡業に旅立ちました。

京都 (京都座)

岐阜 阜 (松竹座)

豊橋

京割
家じあ

木綿橋西詰
電話二二三九番

高子第一番料理
八夜由時止

九 月 の 芝 居 案 内

座 名

道頓堀
中 座

道頓堀
角 座

道頓堀
浪 花 座

狂 言 名 題

出 勤 俳 優

三 日 初 日 三
の 部 十 部 部
の 夜 五 部 部
制 部 二 半 時 半 時

九 月 は

一 日 初 日 一
晝 時 二 時
夜 時 五 半 時
演 開 回 二

新 装 記 念 興 行

【東 西 合 同 大 歌 舞 伎 部】

一 番 目 紅 蓮 の 都 三 幕
中 幕 六 三 心 中 浪 華 香 雨 一 幕
所 作 事 踊 る 時 代 風 景 三 幕
五 月 月 雨 長 限 連 中
月 の 大 漁 常 盤 津 連 中
紺 屋 の お ろ く 長 限 連 中

夜 部 の 部
一 番 目 唐 人 お 吉 と 裏 夷 群 三 幕
二 番 目 徳 兵 衛 重 井 筒 常 盤 津 連 中
大 喜 利 勢 獅 子 常 盤 津 連 中

拳 闘 試 合 と 柔 拳 大 會

主 催 國 際 柔 拳 俱 樂 部

【松 竹 家 庭 劇】

① 街 の 谷 底 一 幕
② 炭 焼 く 男 一 幕
③ 新 家 庭 讀 本 三 幕
④ 沖 の 鷗 三 幕
⑤ 新 祇 園 小 唄 一 幕

天 外、致 雄、左 久 馬、喜 鶴、文 童
時 彌、京 之 助、鐵 彌、天 照、十 吾
東、春 日、御 室、春 野、橋、村
田、浪 花、石 河
高 田、元 安、山 田、小 織

福 助、吉 三 郎、駒 之 助、扇、魁
童、延 太 郎、九 團 次、成 一、鷹
之 助、福 太 郎、橋 三 郎、魁 車
松 蔦、訥 子、團 治 郎、壽 美 若、
松 三 郎、龜 藏、壽 美 藏

九月の映画案内

座名

道頓堀

松竹座

道頓堀

朝日座

道頓堀

辨天座

映題

太平洋爆撃隊
進めオリズムピック
ムーラン・ルージユのタ
オーバーザ・ヒル
空の花嫁
運命の女

我輩は楽しく地獄へ行く
靴屋の大將
工場の女神
金髪の花潮
男性の血潮
戀を喰べる女
ハリウッドは大騒ぎ

栗島すみ子主演
オール・トーキー
情
林長二郎主演
オール・トーキー
怒濤の騎士
八雲恵美子・岡譲二・竹内辰一主演
演の贈

オール・トーキー怪異劇
謎ゆふなぎ草紙
下加茂オール・スターキヤスト
林長二郎主演・川崎弘子主演
不
如
下加茂オール・スターキヤスト
天晴れ久六
オール・トーキー
歡喜の一夜
岡譲二・川崎弘子・澤蘭子主演

阪東妻三郎主演
神變壽
香猫
第二篇 大江戸戦慄篇
清涼卓明監督
まほろしの母
高田稔主演
街
青春争闘篇

金澤伊都夫・荒木忍・歌川八重子主演

選入賞懸「日每一デンサ」

大阪歌舞伎座

上演脚本本發表



出誕迫る演劇の錦城へ

輝きでる劇壇の收穫

待たれる今秋のコケラ落し

萬人待望の焦點！未來の大阪文化を約束する新しい演劇殿堂——大阪歌舞伎座開場記念興行を意義あらしめるため、大阪毎日新聞社が『サンデー毎日』誌上に於て、さきに賞金二千圓を懸け開場記念興行上演脚本を募集しましたところ、この計畫は一般多大の同感を以て迎へられ應募總數實に千二百二十一篇の盛觀を呈しましたこれはさりもなをさず、演劇と大衆の交遊がより深まり、一般に演劇そのものに對する親しみが密接になつたこと、また他方、劇文學に對する理解が普遍化され、多くの有爲の人々によつて劇化がなされつゝあることを裏書するもので同時に演劇が單なる低調な娯樂物としてのみ存在物だつた時代を一步抜き出で、本當に演劇そのものが、われらの生活に、いかに重要性を具備してあるかといふ認識が強調されてきた證左で、實にわが國劇壇のため慶賀すべき現象です。選に當つた大阪毎日新聞社編輯局各關係者は、この應募各位の熱意に動かされて再び三愼重なる詮衡を遂げた結果、茲に愈よ大阪歌舞伎座の開場を飾るにふさはしき力作三篇の入選を發表と共にこの新劇場に送り出すことになりました

入選三篇

【一等一篇】賞金 一千圓
歌舞伎名所圖會 (二幕三巻)
東京市麹町區三番町三番地

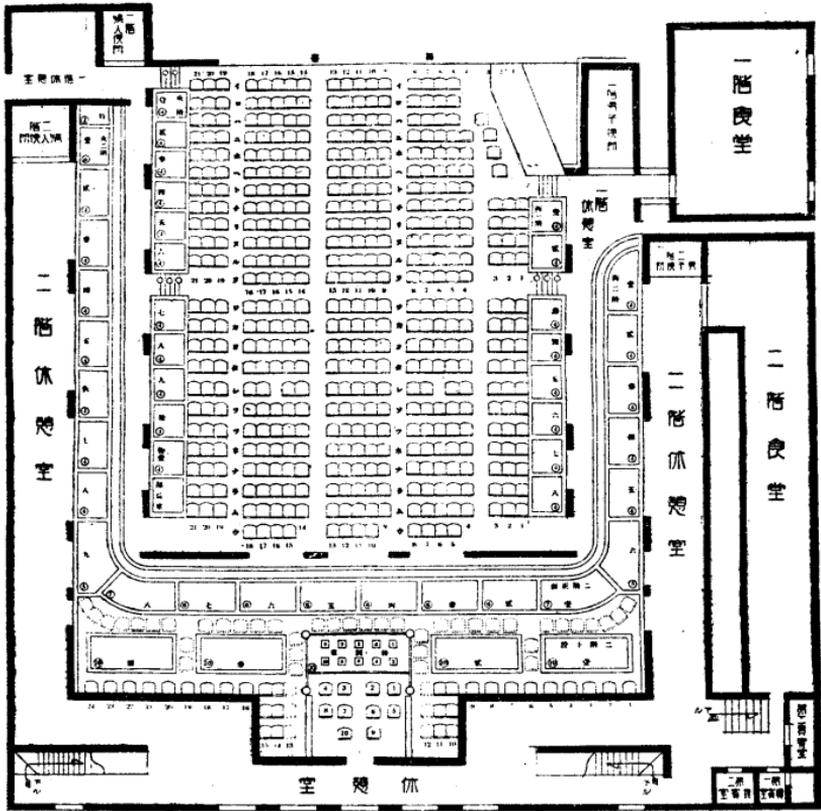
三好次郎

【二等二篇】賞金 各五百圓
秀吉と家康 (二幕三巻)
東京市外高田雜司ヶ谷
一・二・四 市川しげ方

伴 槇彦

堂島繁昌記 (二幕)
東京市小石川區宮下町四番地
大村嘉代子

内案御席、場御座樂文



御、観、覽、料、の、外、一、切、御、不、要、の、上、大、部、分、椅、子、席、に、な、つ、て、居、り、ま、す、か、ら、お、一、人、で、も、御、愉、快、に、洋、服、で、も、お、楽、に、御、見、物、が、出、來、ま、た、お、出、入、が、御、自、由、で、す。

前、賣、切、符、壹、等、お、座、席、壹、等、椅、子、席、の、お、切、符、は、五、日、前、か、ら、發、賣、致、し、ま、す、ま、た、五、日、以、後、の、お、切、符、も、壹、等、席、に、限、り、御、豫、約、申、し、上、げ、ま、す、か、ら、上、圖、の、座、席、表、に、依、つ、て、お、早、く、御、望、み、の、御、場、席、を、お、申、し、込、み、に、な、れ、ば、お、心、の、ま、く、に、お、好、き、な、處、が、御、自、由、に、さ、れ、ま、す、御、用、命、の、節、お、呼、出、し、の、電、話、は、

南、四、七、一、一、番、で、御、座、ら、ま、す

切、符、賣、場、右、指、定、席、切、符、は、當、日、前、賣、さ、も、正、面、西、側、本、家、入、口、に、て、發、賣、し、て、居、り、ま、す。

二、等、席、三、等、席、切、符、は、當、日、正、面、入、口、に、て、發、賣、致、し、ま、す。

尚、多、人、數、様、お、團、體、様、の、お、申、込、も、御、相、談、い、た、し、ま、す。

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひます。お仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雑誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。(クラブ化粧室。)

お煙草は

一階二階廊下に喫煙室を備へてあります。からお煙草はぜひ此處で御願ひ致します。御座席では御遠慮下さい。

御携品

正面一階に御預り所が御座います。お持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備があります。おそれはお願ひいたします。御歸りは混雑いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのこきは御携帶願ひます。

お場席は

各自に御持ち下さい、切符に一枚づつ番號が附いて居ります。からお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします。御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行届の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

案内人へ

案内人がお茶を差し上げます。から御休憩所でお自由にお飲み下さい。

幕間中は

寫眞撮影は絶對にお断りいたします。

出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めます。から、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい。『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります。一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。から御使用下さい。

御休憩の間は

四ツ橋 文樂座

前賣切符専用電話南四七二番
電話南 七四〇八番
三七八八番

昭和七年八月卅日印刷
昭和七年九月一日發行

大坂・四ッ橋文樂座
發行人 大塚 良三 編輯 成山 桂三

大坂市西區土佐堀通二丁目
印刷者 永井太三郎

大坂市西區土佐堀通二丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

爽かな初秋のお集ひは

『文樂座の御宴會』

お決め下さいまし。

郷土趣味豊かな場内の感觸
明朗生鮮な食堂の新氣分

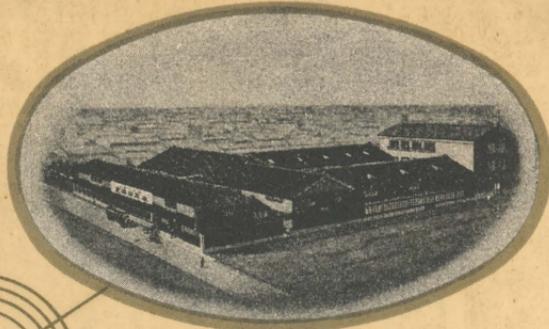
金三圓五十錢 (御一名様)

御觀覽は……一等椅子指定席
御食事は……氣の利いた卓子
記念寫眞……人形を入れた特別撮影

(即日お持歸り出来る様速成)

床本と役割のついた美裝の番付
お申込は廿人様以上なるべく五日前に……
お電話の御利用は……南四七一一番





樹工及所業營



刷印るゆらあ
所刷印堂英日井永

目丁一通堀佐土區西市阪大
番三八〇三長 } (44) 堀佐土
番四九九四 }
番一四九九

